

interview インタビュー

今月のゲスト刀根麻理子さんは、1冊の本を携えて現れた。子どもの頃は、鍵っ子の一人っ子という環境で育ったせいか大変内向的で、学校ではいじめの標的だったとのこと。本は、小さい頃から現在に至るまでの、ご本人の心の投影が詰まっている自著『いつも心にヤジロベエ』（主婦の友社刊）であった。自らの体験から教育や福祉問題に深い関心を持ち、執筆や講演活動が続ける刀根さんにインタビューした。

（聞き手：秋田 徹，鈴木清明）

プロフィール とね・まりこ

1984年テレビアニメ「キャッツアイ・PART II」のテーマソング、「デリンジャー」で歌手デビュー。野原花子のペンネームでは、演歌や子ども向けの楽曲も創作。東京福祉専門学校や東京コミュニケーションアート専門学校の顧問も務めた。骨髄バンクへのドナー登録普及啓蒙運動のボランティア活動、障害者バンド・ハンディーズ「この緑の地球を……」プロデュース。など

歌手

刀根麻理子さん

—デビューされたのはいつですか。

1984年の秋です。テレビアニメ「キャッツアイ・PART II」のテーマソングで、リズム的なポップスだったんですが、デビューをして間もない頃に、ビートたけしさんの番組のエンディングでスタンダードを歌っていたんです。その時の印象が強かったのか、いまだにジャズシンガーと思われている方が多いようです。

—きっかけはなんだったのですか。

父はミュージシャンで、越路吹雪さんや江利チエミさんといった方たちのバックで、演奏していたそうです。ですから、ご飯や空気のように家の中に存在していた音楽を私は好きでしたけれど、父の身勝手さが、そのまま芸能界への嫌悪感に繋がっていて、この世界でお仕事をしようとは少しも思っておりませんでした。高校の放送部時代に、ナレーションの面白さに目覚め

てしまい、OLをしながらアナウンス学校に通いました。その後、フリーでのお仕事が順調に増えていく中で、ある事務所を紹介していただくことになったのです。でもそこは、音楽事務所でした。

突然、「歌のデモテープを作りましょう」と言われ、あ然とした私の脳裏には、「フリーはどんなことをしてでも印象づける」という、先輩たちの声が聞こえ、2週間後にスタジオへ行くことになりました。さらに数週間後、レコード会社の人が破格の給料を提示し、当時、母と2人の生活費を捻出していた私は、操られるように契約書にサインをしたのです（笑）。

—子どもたちへ『いつも心にヤジロベエ』という本を出版されましたよね。

もう、十年位経ちますでしょうか。イジメを苦に、長い遺書を残して中学生の男の子が自殺しました。各ワイドショーは、ドラマの主人公のように彼を扱いました。



「生きていて本当によかった！って、未来の自分が笑っているよ」
子どもたちに自分の中の生きる力に気付いてほしくて、本を書きました。

私も子どもの頃に、死のうと思ったことのある1人として、嫌な胸騒ぎを覚えました。「こんなテレビを見たら、後追いする子が続出する！」“死”に自分の存在を託しても、砂浜に描いた絵のように、人の記憶から呆気なく消えるものです。「生きていて本当によかった！って、未来の自分が笑っているよ」と、自分の中の生きる力に気付いてほしくて、この本を書いたのです。

——骨髄バンクのボランティア活動にも関わっているとのことですが。

ある日、高校時代の担任の先生から電話がありました。児童文学作家でもある奥さんの作品で、骨髄移植をして元気に1年生になるという男の子のことを描いた「金色のくじら」を「朗読劇にする。そのテーマソングを娘が作った。歌いにきてくれないか」。これが骨髄バンクに関わるきっかけになりました。

今度の8月の23、24、25日の3日間、骨髄移植に関心のない人たちにも、十分に満足していただける内容の舞台劇を文京シビックホールで上演する運びとなりました。元劇団四季の俳優さんや元お相撲さん、もちろん、私も舞台に立つ予定でございます。

2001年9月12日、アメリカのドナーから提供された骨髄液が、日本の3人の患者さんのために空輸されることになっていました。患者さんは既に、放射線の全身照射と大量の抗ガン剤投与で、自らの力では血液を造れず、無菌室で移植の瞬間を待ちわびていました。しかしその前日に、あの同時多発テロが勃発したのです。アメリカ中の空港は閉鎖され、全面飛行禁止になりました。骨髄が届かなければ、患者の生命は危機に晒されます。

この戒厳令下で、現実にチャーター機が日本まで飛んで来ました。この事実に触発された原作者H. T. ISSUIが書いたフィクション、『IMAGINE 9.11』を舞台化するもので、人種間差別や根深い憎しみ等が、人間愛によって変貌していく様は見ものです。

縦割りの社会から、心で心をつなぐ社会の実現を願ってやみません。

——弁護士会も骨髄ドナー候補者の最終同意に際し立会弁護士を派遣*しています。

弁護士さんは、個で動いているというイメージが強いせいか、組織として関わっていただいているということは、失礼ながら存じませんでした。ただ、骨髄移植の最終同意の中で、ドナーへの説明や同意に際し、弁護士さんが立ち会って適切な移植が行なわれているということは、民間骨髄バンクの時代から知っていました。とても素晴らしいことだとずっと感じていましたよ。私は民間骨髄バンクの時代から、公的骨髄バンクの黎明期、そして現在まで、ずっと骨髄移植問題に関わってきました。東海骨髄バンクの頃より、法律の専門家である弁護士さんがサポートをしてくれていたことは、とても心強かったですね。

——弁護士の印象とか要望などありましたらお聞かせください。

一元的なイメージとしては、どこか近寄りがたく、職業として相談者と向き合った場合、ある意味で感情をシャットアウトできる人たちとっていました。けれど、骨髄バンクに関わっている弁護士さんたちとお逢いする機会が増えるにつれ、その考えは払拭されてしまいました。テレビや小説の世界だけではなく、人間味あふれる方が多いですね。

本当に心のある弁護士さんって、仕事でのプレッシャーも大きいだろうなって思うので、一言では言い難いんですけど、法的な問題解決だけではなく、心の問題も同時にサポートできる、心豊かな弁護士さんがより一層増えることを願っております。

(構成：秋田 徹，鈴木清明)

*東弁では1995年から骨髄ドナー候補者の最終同意の際の立会弁護士を派遣している。1995年9月から2005年3月までの派遣依頼は約2300件。